

# 武蔵野に住んで

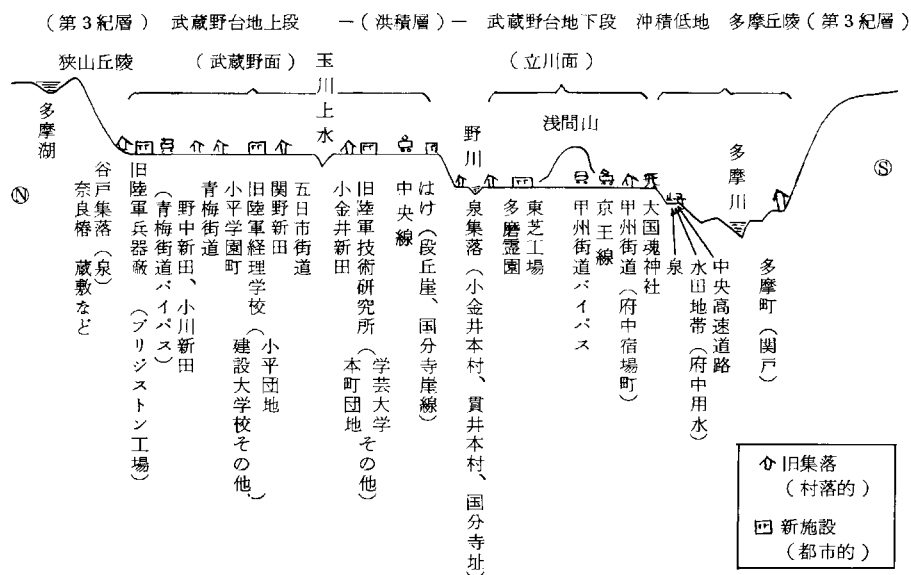
山鹿 誠次

東京の西部、武蔵野の一隅である小金井に居をかまえてから約15年、その間に周囲の様子はずいぶん変った。はじめはかなり多かった雑木林や畑も、しだいに少なくなり、市内には2000戸の住宅団地もあれば、13階建のマンションも建った。

都市と村落の入りまじるところが郊外であり、そこでは都市側が常に攻勢に立つ。田園のただ中に工場や学校ができたり、農村の中へ住宅がくいこんだりして、都市化が進んでいく。しかし、一見、混沌とした郊外の変容も、ていねいに調べてみると、武蔵野の自然や開発のあゆみ、そこへ波及する都市化の原理があって、それらが現在の武蔵野における諸現象の地域的配列に投影していることがわかった。

いま、府中から小金井、小平、東村山のあたりで、武蔵野を南から北へ縦断してみると、古い集落と新しい都市的施設が交互にあらわれて、一つの縞模様をつくっている。甲州街道の古い宿場町、その北側の新しい住宅地や工場群、武蔵野を二段に分つ段丘崖にそって発達した古い泉集落、中央線にそう新しい都市、五日市街道ぞいの新田集落といった具合である。図はこの断面を模式的に示している。

武蔵野の南北断面



このような配列はどこから生じたのであろうか。地下水層が深く、水の乏しい武蔵野台地では、まず水が自然に得られる台地の末端、段丘崖の泉地帯、丘陵にくいこんだ谷戸などに人は住みついた。次に玉川上水が台地の尾根にひかれ、これによって青梅街道や五日市街道ぞいの新田集落が生れた。

こうした武蔵野の農村へ、東京の膨張によって都市的施設が進入してきた。その場合、新施設は古い集落をさけて、その中間にくいこんでいくことが多い。これは都市的施設のために農村が土地を手ばなす場合、一般に農家の宅地や耕地をのこして、農村の中間にある山林から先に手ばなしていくためである。そこはもと薪炭や堆肥用の草刈場で、耕地にくらべれば農業上の重要度は少なく、他方進出する都市側にとっては、地価が比較的安く、広くまとまった土地を得ることができる。

このため山林部から都市化がはじまるわけである。たとえば、青梅街道五日市街道にそって古い新田集落があり、そのたんざく型地割の背後にある山林地へ、小平学園町や旧陸軍施設が入り、現在後者は小平団地や建設大学校などになっている。五日市街道と泉集落の間や、青梅街道と谷戸集落の間にも、旧軍施設が入り、現在は大学や工場などに利用されている。泉集落と甲州街道の間にも、東芝工場、多摩霊園などが入っている。

こうして旧農村と都市的施設が交互にあらわれ縞状の配列を示すようになったのである。つまり、このような新旧集落の配列や土地利用の現在に、かつての武蔵野の開発の姿がのこっているといえよう。

武蔵野に住み、周囲を歩いているうちに、私は以上のことを考えてみた。地域にあらわれた現象の中から、これを系統だて、一つの理法を求めていくことが、地理の研究法の一つではないかと思うからである。

## 悲 愴 交 響 曲

別 技 篤 彦

A大尉は私がジャワにいたとき親しくつきあっていてた将校である。彼は美術学校（今の芸大）出の新進の洋画家であった。少尉で召集された彼は開戦以来ジャワ派遣軍の軍司令部の参謀部に所属し、その特殊な技能を買われてインドネシアの芸能人相手の文化工作に一役買っていたのである。彼がいかめしい軍服をつけた姿はほとんど見たことがない。いつも開きんのスマートな防暑服を着て、それには階級を示す畧章さえつけられていなかった。眼にはいつもやさしい光が漂っていた。

彼はその所属の関係から、戦局全体の推移についても明確な判断をもち、1945年8月の原子爆弾の投下、それに伴う終戦交渉の進行などの情報もいち早く私に知らせてくれた。終戦によってこの南海の島に孤立した日本人の間には大きな動揺が生じたが、彼は早く復員して再び自由にカンヴェスに向うことができるのが何よりの喜びであった。彼は毎日のように私の家に来ては時間を過していた。「ひとつ音楽でも聞いて心を落ちつけよう」と彼はいい、私の家に保管してあるオランダ人から接收したレコードのアルバムをさがしていたが、その中からある一冊を引き出し、眼を輝かせてこういった。「こ